子どもがつくるまち

ミニふくおか2024

報告書

minifukuoka 2024 report

目次

はじめに 01
2024年度のミニふくおか 02
ミニふくおか年表 03
広報・制作物の展開 05
当日のしくみ 06
子ども実行委員会・サポーターワークショップ 07
アンケート 10
メンバーのことば 14

ミニふくおか実行委員会

はじめに

「子どもがつくるまち ミニふくおか」は、子どもの主体性・協働性・コミュニケーション力を育み、福岡市の未来を創造的に切り拓く人材を育成することを目的にした事業で、福岡市が2012年度から始め、今年度は13回目の開催となりました。ミニふくおかが始まって12年。ミニふくおか実行委員会では、これからもさらに持続可能な開発を進めていくために、これまで「ミニふくおか」に参加してきた大学生世代の若者を中心としたユースプロジェクトを結成して、初めて若者が中心となって企画運営をする「ミニふくおか」を開催いたしました。

開催当日、会場となった福岡市美術館エスプラナードは、テーマ「ひとりひとりが輝くアートタウン」のように、多くの子どもや若者たちの輝く笑顔が溢れる子どものまちでした。成功の要因は、ユースプロジェクトメンバーの存在と活躍です。ユースメンバーは、子どものまちの仕組みをつくった子ども実行委員、子ども実行委員を支えるサポーター、ボランティアスタッフ、コーディネーターなど多くの関係者と、心を一つに一致団結して、参加した当日市民となる子どもたちが楽しく安心して過ごすことができる子どものまちを運営することができました。一人ひとりのユースメンバーが、初めての本格的な企画運営、直面する様々な条件、次々に起こる課題、膨大な業務量を、はじめは戸惑いながらも投げ出すことなく、それぞれに与えられた役割を見事に果たしたからこそ成し得たことでした。

私は、今回コーディネーターとしても関わりましたが、「子ども・若者の中にある力と可能性」を改めて実感する機会にもなりました。ミニふくおかで大切にしてきた「子どもによる企画や運営」「社会の多様な人とつながり、学び、視野を広げること」「新しく創造的につくりだしていくこと」「みんなで力を合わせてやり遂げること」などの経験が土台となって、それぞれの個性で育ち、ミニふくおか当日の活躍はもちろんのこと、学校や社会で活躍している様子が伺えました。子どもの頃のミニふくおかの経験が、いかにその後の人間形成や生き方に影響を及ぼすのかを、ユースメンバーやボランティアで参加した若者たちの声や姿から感じることができ、この事業を継続してきたことの成果と意義を捉え直すことができました。

子どもを取り巻く状況は、変化が激しい中で多くの社会課題を抱えていますが、それらの解決に当事者の声を聴くことや、多様性の尊重、体験格差の是正などがあげられており、「ミニふくおか」のような事業がますます求められていると思います。今回の事業で証明された若者が持っている力。これからは、若者が中心となって、子どもがたくましく育ち、福岡市の未来を創造的に切り拓いていくことを確信しています。

最後になりましたが、事業実施にご協力・ご支援いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

令和6年12月

ミニふくおか実行委員会委員長　高宮 由美子

2024年度のミニふくおか

日時：2024年11月17日(日)
会場：福岡市美術館　エスプラナード
主催：ミニふくおか実行委員会、福岡市　　後援：福岡市教育委員会

2024年度テーマ

ひとりひとりが輝くアートタウン

福岡市美術館での開催に伴い、「アート」を主なテーマとしてまちづくりが行われたミニふくおか2024。子ども実行委員たちは、様々なアートに触れながらワークショップに参加し、まちやしくみづくりに活かします。「わくわくするまち」や「ひとりひとりが笑顔になるまち」という思いを込め、「輝く」という表現もテーマに含まれています。

ミニふくおかの目的

「子どもがつくるまち　ミニふくおか」では子どもたちがまちの中で学び、遊び、創造することで自分たちが暮らすまちに関心を持ち、社会参画意識を高めること、子どもの主体性や協働性・コミュニケーション能力を育み、福岡市の未来を創造的に切り拓く人材を育成することを目的にしています。

ミニふくおかの基本理念

子どもたちの主体性と創造性を育むため、「ミニふくおか」当日や子ども実行委員会で以下の理念が守られるよう、子ども実行委員・サポーター・スタッフ全員が理解し、みんなで守ることに努めています。

① 「知る　考える　伝える　新しくつくる」ことを大切にしよう
② クリエイティブなこととの出会いを積極的に進め、創造力を高め、社会とのつながりを広げよう
③ 一人ひとりの役割と出番をつくり、子どもによる活動や運営をすすめよう
④ 自分の考えやアイデアを大切にすると共に、みんなのことを考えて決めることを大切にしよう
（２つのP「Personal(個人)&Public(公共)」を大切に）
⑤ お互いを尊重しあい、みんなが安心して活動できるように一人ひとりが心がけよう
（ココロとカラダの2つの安全確保）

当日参加者　459名

小学3年生～中学3年生(当日市民)：337名
小学3年生未満：58名
小学3年生未満の保護者：64名

子ども実行委員	サポーター	ボランティアスタッフ
24名	14名	20名

ミニふくおか年表

今年度のミニふくおかはオープン型イベントとして開催されました。当日市民のみならず、より多くの人にミニふくおかについて知ってもらうために、まちの中に「ミニふくおか年表」を設置しました。これまでの「ミニふくおか」について、参加した人たちが、それぞれの思いをカタチにできるようになっています。

ミニふくおかとは？

「子どもがつくるまち ミニふくおか」は、子どもの主体性・協働性・コミュニケーション力を育て、福岡市の未来を創造的につくっていく人材の育成を目的とした事業です。2012年度にスタートし、今年度で13回目の開催となります。ミニふくおかには市民としてまちに集まる子どもたちと、まちのしくみをつくる小学生・中学生の子ども実行委員、そして、子どもたちを支える高校生以上のサポーターがいます。子ども実行委員は、公募で集まった小学5年生から中学生までの子どもたち。サポーターや様々な分野のプロの専門家と一緒に仮想のまちとしくみをつくり、イベント期間中はつくったまちを運営します。子どもの活動には、子どもたちと年齢が近く憧れや目標の人として力を引き出してくれる若者の存在がとても重要です。子ども実行委員会では、中学生がリーダーとなることで、小学生は中学生に支えられている実感と年長者への憧れを抱きます。同じように、小中学生はより難しい仕事をこなす高校生以上のサポーターに支えられている実感と憧れを抱きます。こうして成長する若いパワーは「ミニふくおか」の誇り。今年度はこれまで「ミニふくおか」に参加してきた25歳以下の若者を中心に「ユースプロジェクト」を結成し、イベントの企画・運営を行っています。

子どもたちがまちのしくみをつくることと、中学生がリーダーとして活躍すること、それを手助けするサポーターがいること、また、子どもが持っている力と可能性、社会とのつながりを広げ、創造力を高めるために、様々な分野の専門家と一緒にまちについて学び、つくってきたことがミニふくおかの大きな特徴です。

レインボーミニふくおか
～ミんなが　ここにこ　ふりーな　くらしを　ありじなるでおもしろく　かいてきに～
九電記念体育館

「ミニふくおか」のはじまりの年。この年に定めた「市役所・ハローワークがある」「働いたら給料がもらえる」は、現在の「ミニふくおか」にも受け継がれるまちの定義です。初年度は、レインボーをテーマに７つの地区をつくり、それぞれ個性あふれるまちを運営し、お隣には「英語村」もありました。

2012

2013

2014

We Love ミニふくおか
九電記念体育館

２年目の「ミニふくおか」はいろんな所に自然がありました。まちに竹が生え、まちのまわりには川が流れ、鳴水や動物園など新しいスポットも増えました。竹はミニふくおか終了後はたい肥としてリサイクルされました。また、「英語村」と連携し、「英語村」で働いてもらった給料をミニふくおかの貨幣両替所で換金できるしくみにするなど、2012年よりもパワーアップした内容になりました。

輪っしょいミニふくおか
～太陽のようにかがやく笑顔～
九電記念体育館

３年目は中学生がリーダーに。これまでの「ミニふくおか」の経験や知識を活かしながら、小学生と一緒にまちをつくり、より「子どもたちによる主体的な運営」を進めました。そして、まちには新たに大学ができ、ミニふくおか当日の過ごし方に「働く」「遊ぶ」が中心だった過ごし方に「学ぶ」という要素が加わりました。「大学」での授業は、子ども実行委員や大人の専門家が行いました。まちの中は4つの区に分かれており、それぞれの区にシンボルマークがありました。

きらめく大夢（Time）あふれるミニふくおか
～ 新しい自分に出会うまち ～
九電記念体育館

テーマは時間。「ミニふくおか」には遊園や博物館が誕生しました。そして、時計をモチーフに考えられたミニふくおか公式ゆるキャラ「タイムーン」が登場。未来から現在に夢のかけらを集めにやってきたみんなのアイドルです。台風の影響でイベントは２日間しか開催できませんでしたが、新しい試みを取り入れた意欲的な年になりました。

2015

2016

楽しいところ！うまかもん！
ぱりいっぱい！！ミニふくおか
～ 博多と福岡の文化が交ざりあったツインシティ～
九電記念体育館

実際の福岡のまちのように、「福岡」「博多」「中洲」の３つのエリアがありました。「福岡」には市役所や銀行などの公共施設とネイルサロンや雑貨屋、「博多」にはラーメン屋や着付けなどの文化を感じられるお店、そして「中洲」にはラジオ局や新聞社などがつくられ、それぞれ特徴あるまちづくりが進みました。また、子ども実行委員から市長と副市長が生まれました。

スマイルあふれるミニふくおか
～見方しだいで世界は変わる～
九電記念体育館

「ユニバーサルデザイン」をテーマに、みんなが楽しめるまちづくりを目指しました。誰もが楽しみ、触える5つの「ひろば」があったり、一目でどんなお店か分かるような「ロゴマーク」があったり。初めて参加する子どもたちも仲良く楽しめるようなアイデアが満載でした。また、多様性にあふれるまちを表現するための工夫として、３日間のイベント期間をフルに使って「モザイクアート」を活かしたひろばやまちなみをつくり上げました。

創造のまち　ミニふくおか
～小さなまち、大きな夢～
九電記念体育館

まちを海ゾーン・山ゾーンと大きく２つのゾーンにわけ、海と山に囲まれたコンパクトシティ福岡を再現しました。また、福岡市で行われている「一人一花運動」にならい、「ミニふくおか」でも会場の花農園に1000鉢の花を用意。子どもたちの寄付により、まちに花があふれていくしくみを取り入れました。さらに、３日間でクリエイターと子どもたちがつくり上げた４つのオブジェが完成。変化していくまちの様子を記録した写真や、お店やイベントを紹介するチラシも専用の掲示板に貼って情報が公開できるようになりました。

2017

2018

2019

ワクワク・ドキドキ・ニコニコ
福岡市総合体育館

会場が九電記念体育館から福岡市総合体育館へ。テーマの「ワクワク」は成長した自分に会える期待、「ドキドキ」は初めてのことに挑戦する勇気、「ニコニコ」は新しい友達が増える楽しみを表現しています。中学生リーダーたちによって考案されたまちの世界観は「夢色story」。ふうせんや色紙を使ったオブジェで自分たちの世界観を表現し、カラフルなまちが完成しました。なお、この年のサポーターは建築・都市政策・メディア・サイエンス・伝統文化・教育の６つのチームに分かれ、各分野の専門家に弟子入りしてまちの総合的な計画づくりを行いました。さらに、イベント当日は子ども実行委員と当日市民とが一緒に「まちづくりミーティング」に参加し、新しいまちについて考えました。

しあわせポップコーンシティ
なみきスクエアほか

栄空のまちに暮らす人々の「しあわせ」が次々に増えていく様子を、勢いよく弾けるポップコーンのイメージと重ねて表現しています。「子どものまちクリエイター」と「子どものまちサポーター」、それぞれに向けた５つのワークショップを中心にまちづくりを体験しました。コロナ禍にも対応するためWEBでの応募も受け付け、子どもたちの作品はなみきスクエアロビーにて展示されました。

しあわせポップコーンシティ
なみきスクエアほか

2020年に引き続き、「しあわせポップコーンシティ」をテーマにまちづくりを行いました。コロナウイルス感染症拡大のため大規模なイベント開催は中止になってしまいましたが、代替企画として、リアルとオンラインをかけ合わせたワークショップを準備しました。子ども実行委員はサポーターと一緒にオンライン上の店の店長としてお店をつくり、それぞれの店にはオンラインでお客さんが訪れました。他にもリアルでのアジトづくりワークショップや紙のどうぶつえんづくりを実施。ワークショップの様子はYoutubeでライブ中継されました。

2020

2021

2022

ワークショップ
ミニミニふくおか
ちはや公園ほか

コロナ過以前のような体育館での大規模開催を目標としていましたが、感染状況を鑑みて、中止となりました。
しかし、子どもたちがまちについて考え、創造する機会となる「ミニふくおか」ならではの体験を絶やさないように、新しい「ミニふくおか」の形を模索しました。この年は「クエストづくり」、「ムービーづくり」、「居場所づくり」の３つのワークショップを実施。これらの試みに加え、自由に参加できる「ミニミニふくおかinちはや公園」も開催しました。

個性あふれるわくわくタウン ～ まちに彩りを ～
福岡市立南体育館、ちはや公園（ミニミニふくおか）

まず「ミニふくおか」をたくさんの人に知ってもらい、楽しんでもらうために、サポーターが中心となって企画運営をする「ミニミニふくおか」を実施しました。この年のミニふくおかの特徴は、新たなまちの仕組み「クエスト」の導入です。クエストは、まちづくりを体験するお題が書かれたカード型のプログラムで、まちの価値を高めるための様々なクエストをクリアすると、幸せの単位「ハピ」がもらえ、ハピがたまることでみんなの幸せが形になって広場に花が飾られ可視化できる仕組みになっています。当日は、まちの中にたくさんの花が飾られ、イベントとして行われたパレードにより、まちににぎわいが生まれました。

2023

2024

ひとりひとりが輝く
アートタウン
福岡市美術館

初めて福岡市美術館で開催する今年の「ミニふくおか」は、これまで「ミニふくおか」に参加して育ってきた若者が中心となり、「ユースプロジェクト」として企画運営を行っています。個性豊かな子どもたちの自由な発想や創造のパワーで、さらなる「ミニふくおか」のまちづくりの進化が期待できます。
そして、今年度は様々な人たちが「ミニふくおか」にふれられる、オープン型イベントという形での開催です。

おもいではがき

ミニふくおか年表の横には、「おもいではがき」に記入できるスペースがあります。これまで「ミニふくおか」に参加したことがある人や今年参加した人がその思い出を書きこみ、それを掲示することで、これまで目に見えなかった思いが目に見えるようになっています。

ユースメンバーのコメント

これまで約10年間ミニふくおかに携わってきて、過去に実施したミニふくおかの思い出を振り返ったのは初めてだったので、とても懐かしかったです！自分が当日市民として参加したとき、はじめて自分のお店を持ったときのことが思い出されて楽しかったです！

ユースメンバー吉岡大智

私の中でいちばん達成感があったのが、2015年のミニふくおかです。当時中学2年生で、「ミニふくおかのゆるキャラを作る！！」と宣言し、「タイムーン」を作ることができました。今思えば無謀な挑戦ではあったと思いますが、それを支えてくれた子ども実行委員の仲間やサポーター、運営の皆さんには頭が上がりません。また、今になっても「タイムーンだ！！」と言ってくれる子や仲間がいることに感動しました。

ユースメンバー齊田麻邑

広報・制作物の展開

今年度の広報活動について、子ども実行委員やサポーターの募集ホームページへの掲載とSNSの投稿による告知を行いました。イベント当日の宣伝は、ホームページとSNSに加え、チラシを市内の小中学校や公共施設等に配布しました。今年度は、当日市民の事前申し込みが不要で、オープン型のイベントという初めての形での開催となりました。

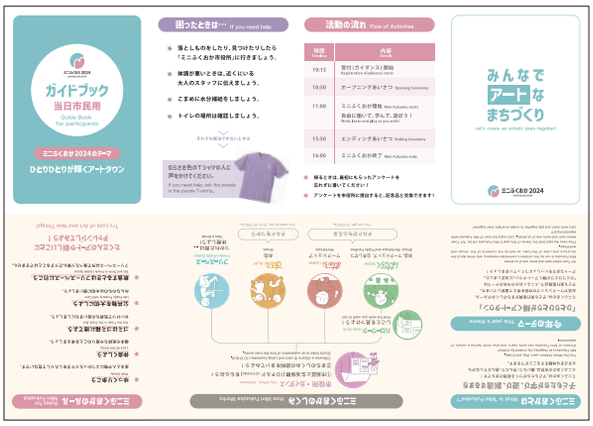
多くの人にミニふくおかを知ってもらいたいという思いから、SNSの活用にも力を入れました。イベント当日は、会場の様子をリアルタイムに更新しました。

▼チラシ

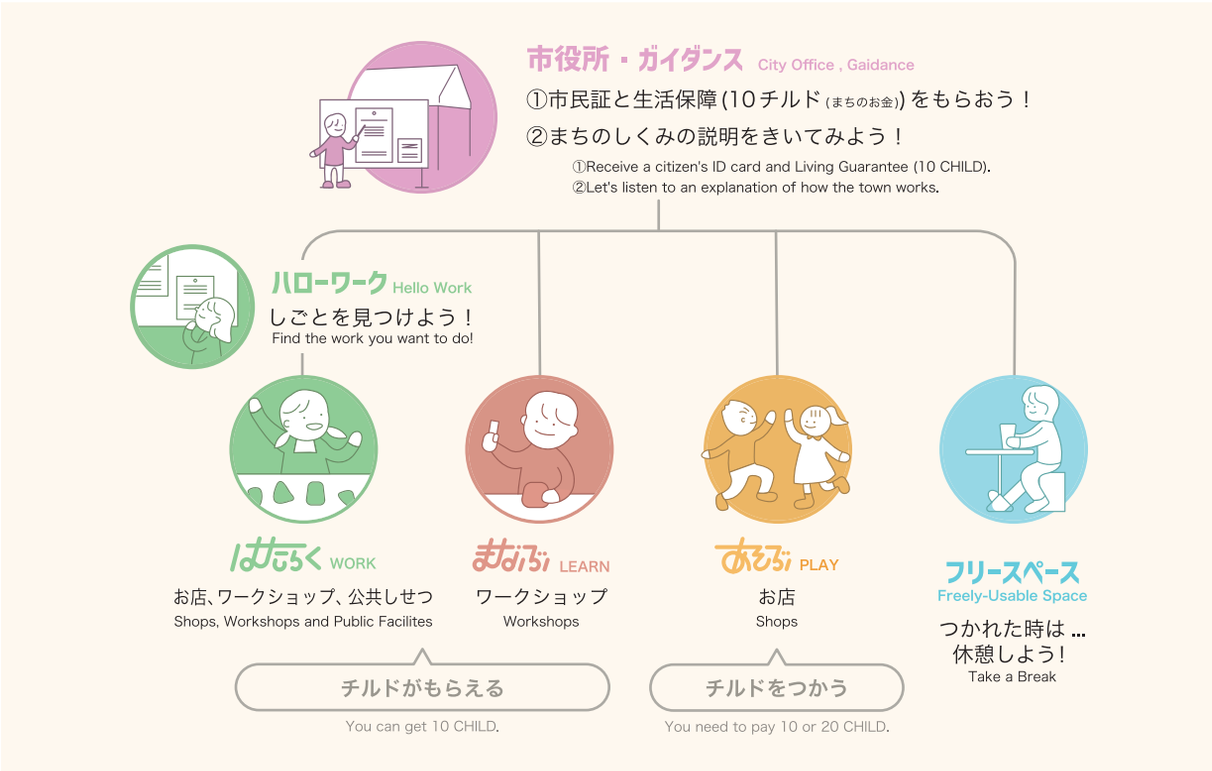
チラシ発行部数

110,000 部

▼そのほか制作物



当日のしくみ



会場マップ

子ども実行委員会・サポーターワークショップ

ミニふくおかでは、公募で選ばれた小学5年生〜中学3年生が「子ども実行委員」、高校生〜大学生世代の若者が「サポーター」となり、協力しながらテーマやロゴ、まちのしくみと当日運営するお店・ワークショップの企画など、様々な活動を行いました。

WORK SHOP #1

ミニふくおかのテーマを決めよう

【日時】2024年9月8日(日)　10:30〜17:00
【会場】福岡市美術館

今年度のミニふくおかの活動はアイスブレイクからスタートしました。アイスブレイクで子どもたちの緊張がほぐれ、サポーターとの距離も縮まった後、ミニふくおかのしくみや本番の会場について学び、最後にはみんなでミニふくおか2024のテーマを決めました。

WORK SHOP #2

アートとワークショップを体験してみよう

【日時】2024年9月22日(日)　10:30〜17:00
【会場】福岡市役所

『ひとりひとりが輝くアートタウン』というテーマをもとに、ユースメンバー(デザイナー)の柴田が作った3つのロゴの中からみんなでひとつのロゴを選びました。その後、ペットボトルでオリジナルのランタンを作りました。最後に、全員でランタンの配置を決め、ひとつの星座を作りました。

WORK SHOP #3

はたらくお店・ワークショップを決めよう

【日時】2024年10月6日(日)　10:30〜17:00
【会場】福岡市美術館

お店グループとワークショップグループに分かれて、実際に当日運営するお店・ワークショップの企画書を作りました。ミニふくおかで自分がやってみたいことを話し合い、オリジナリティあふれるアイデアがたくさん出てきました。

WORK SHOP #4

お店・ワークショップの予行練習をしよう

【日時】2024年10月26日(土)　10:30〜17:00
【会場】福岡市美術館

お店やワークショップの予行練習をしました。前回までに考えたお店やワークショップの企画書をもとに、市民役と店員役に分かれてロールプレイングをし、その後フィードバックを行いました。予行練習で学んだことをもとに、自分のお店やワークショップをより良くするアイデアを考えました。

WORK SHOP #5

お店・ワークショップに必要なものを作ろう

【日時】2024年11月10日(日)　10:30〜17:00
【会場】福岡市美術館

まずは会場マップを見ながら、ミニふくおかが開催される会場を見てまわりました。講師にデザイナーの江副哲哉さん(あおいろデザイン)を迎えて、看板づくりワークショップを行い、カラフルで素敵な看板が出来上がりました。最後に安全講座を行い、参加者がけがをしたり具合が悪くなったりしたときの対応などについて学びました。

WORK SHOP #6

最終確認をしよう（前日準備）

【日時】2024年11月16日(土)　10:30〜17:00
【会場】福岡市美術館

「明日はいよいよミニふくおか当日！」というドキドキした気持ちを胸に、前日準備を進めていきました。午前中はスタッフとサポーターで会場設営や物品の準備、運営マニュアルの読み合わせなど、当日に向けた細かい確認をしました。午後からは子ども実行委員も集まり、各お店・ワークショップの準備を行い、当日が無事に迎えられるよう、最終確認をしました。

WORK SHOP #7

ミニふくおかの振り返りをしよう

【日時】2024年11月24日(日)　13:30〜17:00
【会場】福岡市役所

ミニふくおか当日のまちの様子やこれまでの活動で大切にしてきたことについて振り返りました。「自分が一番『輝いた』と思った場面」や「ミニふくおか2024はどんなまちだった？」などについてしっかりと考える時間となりました。ミニふくおか子ども実行委員会の最後の活動は「かるたづくり」でした。ひとりひとりがミニふくおか2024を振り返りながら、自分の言葉でかるたを作りました。かるたを作り終わった後には、和気あいあいとした雰囲気の中、ミニふくおか本番を思い出しながらかるた遊びを楽しみました。

ほっとする
のみものたくさん
うってます

しらぬまに
れつがたくさん
つづいてる

ひとりずつ
かがやいていた
ミニふくおか

こどもたち
たくさんいるな
たのしみだ

せかいいち
わたしがつくる
スノードーム

うれしいな
ふくらむゆめと
たつじかん

当日市民アンケート

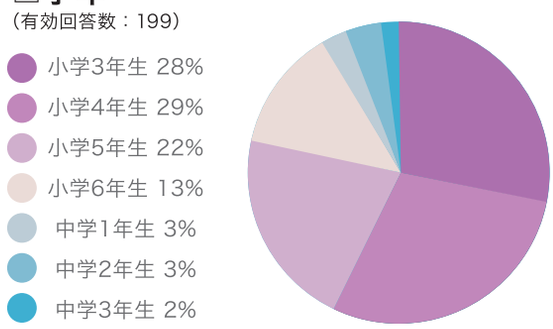
□満足度 90.6 /100 点

（有効回答数：200）

□参加経験（有効回答数：200）

□学年

（有効回答数：199）



□まち・仕事のしくみはわかった？

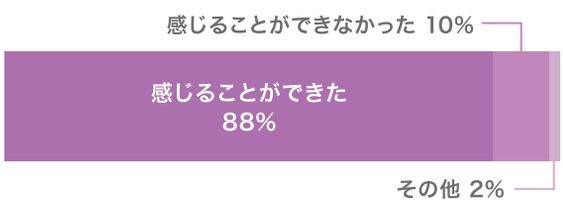
（有効回答数：200）

□自由にのびのびと楽しく過ごすことができた？

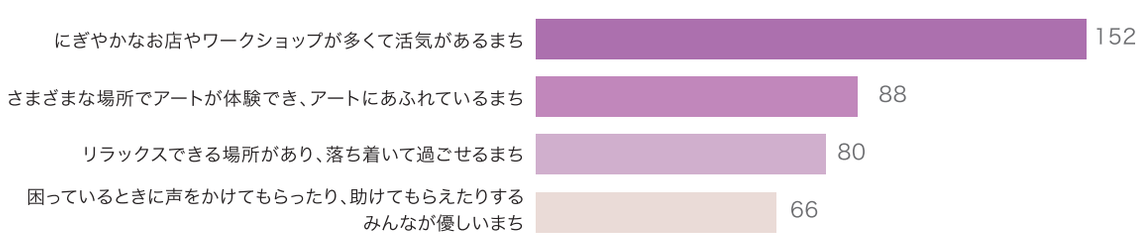
（有効回答数：197）

□「ひとりひとりが輝くアートタウン」というテーマを感じることはできた？

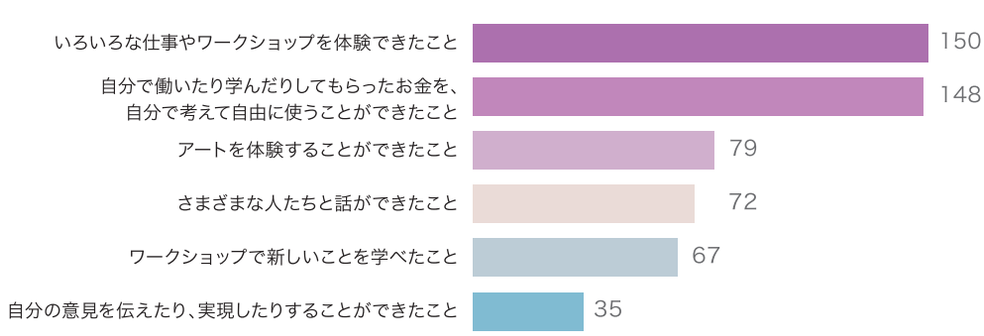
（有効回答数：197）



□どんなまちだった？（有効回答数：197 / 複数回答可）



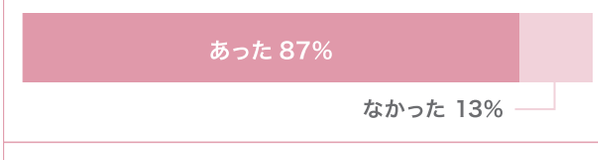
□参加してよかったこと（有効回答数：200 / 複数回答可）



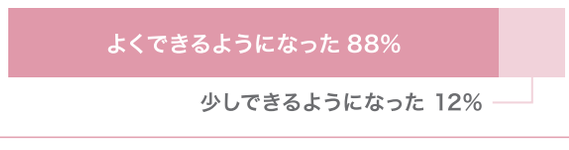
子ども実行委員アンケート

□満足度 96.6 /100 点 （有効回答数：23）

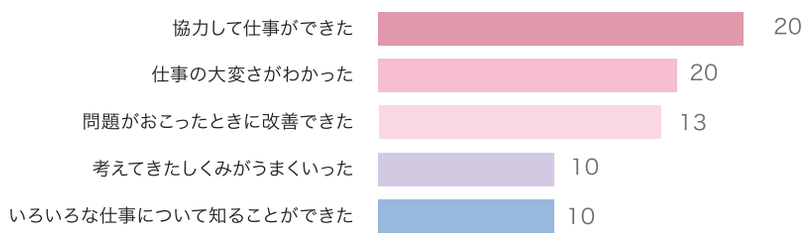
□自分も輝いていると感じる瞬間はあった？
（有効回答数：23）



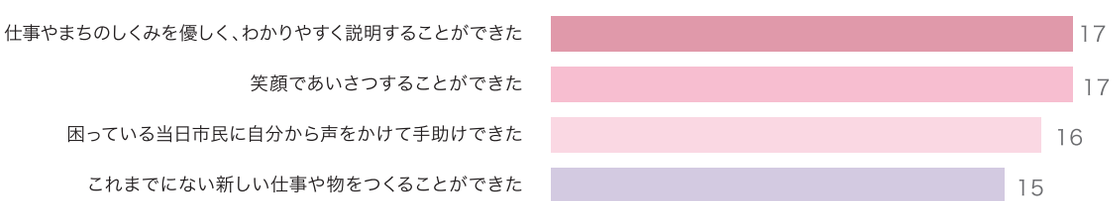
□自分の考えを積極的に伝え、主体的に行動できるようになった？
（有効回答数：17）



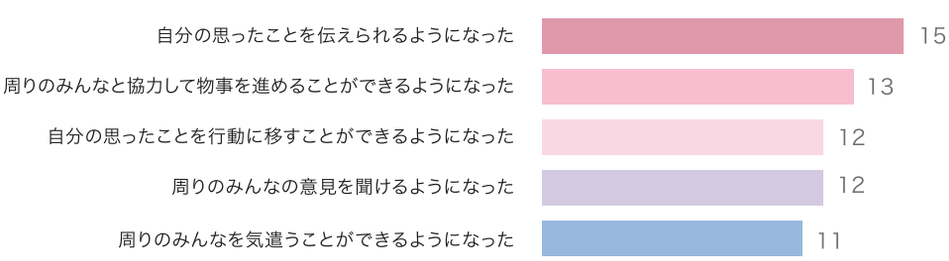
□どんなことを感じた？（有効回答数：23 / 複数回答可）



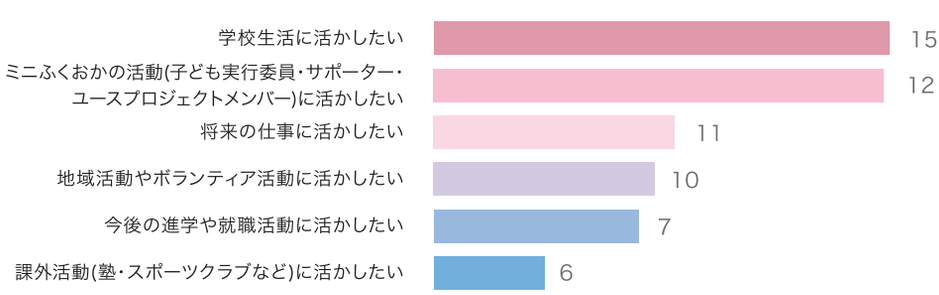
□イベント本番でできたことは？（有効回答数：23 / 複数回答可）



□日常の中でできるようになったことは？（有効回答数：17/ 複数回答可）



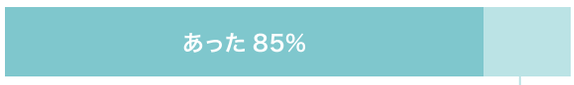
□子ども実行委員の経験をどのように生かしたい？（有効回答数：17/ 複数回答可）



サポーターアンケート

□自分も輝いていると感じる瞬間はあった？

（有効回答数：13）



□子どもたちのサポートはできた？

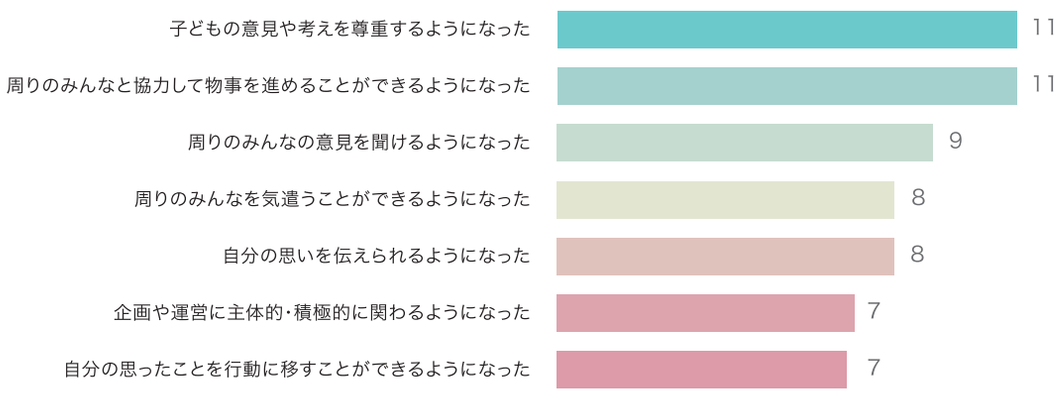
（有効回答数：13）

□サポーターの活動で学んだり経験したりしたことを本番に活かすことができた？

（有効回答数：13）

□これまでの活動を経て、どんなことができるようになった？

（有効回答数：12 / 複数回答可）



ボランティアスタッフアンケート

ミニふくおかを経験したことのある高校生から20代までの方を中心に構成されています。

□ミニふくおかのボランティア体験で、印象深かったことは？

- いろんな年齢の人と交流できたこと
- 子どもたちが自分では気づかなかった方法でスタンプを押してくれたりして子どもの想像力の豊かさに驚きました。
- 子ども実行委員の子たちもすごくしっかりしていてすごいなと思いました！
- 最初はたどたどしく売り子をしていた子が最後には楽しそうに声掛けをしていたこと
- 例年とは違う、若者主体の新しいミニふくおかが見れたこと
- 外での開催が開放的で印象的だった
- しくみがシンプルでわかりやすく、回転が早かったこと
- 15分しか働けないのでは仕事に慣れた瞬間に終わってしまうのではないかと思ったが、子どもが仕事に慣れるスピードが早く驚いた。少し教えるだけで自分で考えながら工夫してくれたのでやりやすかった。
- コミュニケーションを取るうちに子どもたちの笑顔の回数が増えていくこと。
- ボランティアスタッフの連携がすごくて、とても心強い！そのため活気が出てスタッフも自分を出せる明るい場になっていた印象。
- ユースプロジェクトメンバーが活躍していることで、より子どもに寄り添った活動ができているように感じた
- 小学3年生未満の子どもたちと関わることで、学年が一つ違うだけで作品の完成度や理解度が全く違ったのがとても印象深かった
- 朝からまちがどんどん成長して、フィナーレのときには綺麗に飾り付けられていたこと。
- 「前から来たかった！」や「去年のお金持ってきました！」など、子どもたちのミニふくおかへの想いに触れることができたこと

□ミニふくおかに参加して、学びや成長につながったと感じるところはあった？

- 話すことが難しいと感じていたけど、前よりも自然に話すことができたこと
- 私は教育系の進路を考えているので子どもと触れ合える体験ができて良かったです！
- 高校生のときに参加した時と子どもたちの反応や行動に対する感じかたが変わっていたことに気づけた
- 様々な性格の子供たちをみることができました。その子たちがどうしたら主体性を発揮して、ミニふくおかを楽しめるか考えて発言できました
- 大学内にいると交流の範囲が大学生だけになるが、ミニふくおかでは小学生から大学生・大人までのさまざまな年齢の人が協力して行っているため普段は関わらない人とも一緒に協力して行えた
- サポーターの場の回し方が上手で、多くの人に分かりやすいようなまとめられる説明を聞いて場の作り方を学んだ。
- 予想外の出来事の連続なので、臨機応変に、連携しながら主体性を持って動くことができた。
- 様々な年齢の子どもや保護者と関わる中で、関わり方を考えながら接することを学べた。
- 自分にできることとやるべきことのバランスをとりながら場を回すこと。子どものまちとしてのコンセプトを最大限活かしつつ、保護者の方を含む来場者の方々がなるべく満足できるように考えました。

サポーターリーダーの視点

井家上　知花

こどものまちはドイツの「ミニ・ミュンヘン」をモデルとして行われ、10年ほど前から日本全国で開催されている。ミニふくおかでも毎年約600人のこどもが社会を模擬体験する社会教育に関する最大級のイベントになっている。そんなミニふくおかでワークショップのサポーターリーダーを務めた。今年のミニふくおかは例年と異なり、申し込み不要のオープンスペース型かつ初のユースメンバー主導ということで、予測不能な事態も起こったが、コロナ禍で一旦途切れてしまった参加者の新規開拓と学生育成という面で一新されたイベントとなっていた。

何はともあれ、参加者300人越えというイベントの成功を収めたわけであるが、やはり注目するべきはこどもたちの表情と保護者の反応であろう。子ども実行委員のこどもたちは最初こそ、緊張した面持ちで、「お客さんがちゃんと来てくれるのだろうか」と心配していたが、いざまちを開き、第一陣となる市民のこどもたちが足を踏み入れた時から、真剣な面持ちに変わり、ワークショップへの呼び込みをしていた。また、市民のこどもたちは最初こそ仕組みが分からず、右往左往していたが、時間がたつにつれて、適応し、自ら考えて、「スライムは並んでいるから、先におしごとしてくる」といった行動に移していた。そして、普段のこどものまちでは完全分離されている保護者からも、「自分のこどもがこんなに色々考えながら、出来るとは思わなかった」などの声が上がっていた。

サポーターリーダーとして、100点だったかと言われれば、まだまだ、改良できた点があったように思えるが、こどもたちと共に考えながら、共に成長できたいい機会となった。

中川 潤人

ミニふくおかとは、子どもたちが主体となり、仮想のまちを作り上げる体験型イベントです。私はサポーターとして参加し、子どもたちが主体的に活動できるようにサポートしました。活動の中で、私は二つのことを大切にしていました。

一つ目は、子どもたちが自分の考えや意見を形にして伝えられるようにすること、二つ目は、子どもたちの意見を最大限尊重することです。私自身、チームで活動する際に周りの意見に流されたり合わせてしまったりする経験が多くあり、自分の意見を伝えることが難しいと感じていました。しかし、ミニふくおかでは、子どもたちがそれぞれの理想のまちのアイデアを持っており、それらを形にすることが重要であると考えました。また、そのアイデアを子どもたちが自分自身で周囲に伝える力を身につけてほしいとも思いました。

生成AIなど新技術の台頭により、これまで以上に対話力や主体性が求められる時代となっています。未来の福岡を担っていく子どもたちが、ミニふくおかを通してそのような力を身につけてくれることを願いながら、サポーターを務めました。具体的には、ある子どもが初めは口数が少なく、自分から意見を言うことができませんでしたが、活動が進む中で自信なさげだった表情が徐々に変わり、自分に質問してくれることも増えました。さらに当日には、自ら積極的に行動する姿を見せてくれ、主体性が育つ瞬間を間近で感じることができました。

全体を見ても、子どもたちが仲間と協力しながら目標を達成する姿が随所に見られました。私自身にとっても、自分のまちに対する関心や社会性を育む貴重な経験になったと感じます。また、今回オープン型で開催されたこともあり、多くの市民にミニふくおかの活動の素晴らしさを伝えることができたのではないかと考えています。

今後もこのような取り組みが継続され、多くの子どもたちが挑戦し、成長する場が広がることを期待しています。私も引き続き、微力ながらサポートを続けていきたいと思います。

ユースプロジェクトメンバーの視点

齊田麻邑

私は、「ミニふくおか」がスタートした2012年以来、当日市民や子ども実行委員、サポーターの立場をすべて経験させていただきました。大学生になってからは運営スタッフの一員として活動させていただくようになり、主に子ども実行委員会などの現場の運営に深く関わり、子ども実行委員やサポーターと一緒にミニふくおかのまちを作り上げてきました。

今年度は、これまで「ミニふくおか」に参加したことのある25歳以下の若者を中心に「ユースプロジェクト」を結成し、若者が中心となった「ミニふくおか」を初めて実現しました。しかし、準備期間は例年の半分程度で、福岡市美術館で1日のみの屋外開催という新しい試みづくし。加えて、初めての本格的な企画運営と想像以上の業務量に圧倒されてしまう場面も多々ありました。しかし、これらの課題を乗り越えることができたのは、かつて自分が子ども実行委員だったときにサポーターがしてくれたように、コーディネーターの皆さんが絶妙な距離感での助け舟を出してくれたり、メンバー全員がこれまでの「ミニふくおか」で培ったそれぞれのスキルを発揮してくれたりしたおかげだと考えています。

私は、「子ども自身が責任感を持って行動し、失敗を乗り越えることが彼らの成功体験に繋がる」ということを信じています。なぜなら、実際に私自身が「ミニふくおか」で様々なことに挑戦し、そしてたくさんの失敗もしてきたからです。失敗を乗り越える経験をさせてもらえたからこそ、まわりの意見に流されるだけではなく、自分の考えやアイデアに自信を持てるようになりました。もちろん、子どもの中には自分の思いを表現するのが苦手な子もたくさんいます。そのときは私が自分から話しかけることで、子どもの意見や思いを引き出してきました。このアクティブな傾聴力は、私がこれまでの「ミニふくおか」での活動を通して培ったスキルでもあります。

今年のテーマは「ひとりひとりが輝くアートタウン」です。私は、「アート」とは目に見えないモノや思いを、カタチにするものだと考えています。今回はその「アート」の力を借りて、当日のまちの成長やこれまでの「ミニふくおか」の歴史をカタチにすることができました。また、これまで多くの子どもたちが参加してきた「ミニふくおか」は、彼らの主体性や協働性・コミュニケーション力を育んできたと信じています。実際に目に見えることは少ないですが、その証拠として、今年度の「ミニふくおか」の運営をユースプロジェクトメンバーが主体となって行い、また当日にはかつて参加者だった若者たちがボランティアスタッフとして活躍してくれました。

これからも、子どもや若者の力と可能性を信じると共に、自分自身の力も信じ、新たな体験や学びの機会を提供することに貢献したいと思います。そして、「ミニふくおか」が福岡市の未来を創る場として子どもと共に成長し続けることを願っています。

「ミニふくおか」やユースプロジェクトの発足に賛同し、支えてくださった皆さまに心よりお礼申し上げます。

岡昂樹

私はこれまで、当日ボランティアやサポーターとしてミニふくおかに参加してきて、今年度のミニふくおかではユースメンバーとなり、子どものまち副リーダーとして主にサポーターのサポートや子ども実行委員会の企画・運営に携わらせていただきました。

ユースメンバーとして子ども実行委員会やワークショップで何をするのかを考える際、初めはアイスブレイクや全ての活動に対して「とりあえず」や「毎年やってるから」といった曖昧な意味合いで企画を行っていましたが、回数を重ねる毎に今年度のテーマに必要なものは何か、どのような意識付けが必要なのかといった目的意識を持った企画ができるようになり、その後のワークショップの内容をより濃いものにできたと思います。また、ワークショップを運営していく中でも、ワークショップにおけるゴールラインを達成することはもちろん、ワークショップが終わったあとの姿を想像しながら伝えることができるようになり、私自身とても成長することが出来ました。

今年度は会場や開催形態等、初めてのものが多かったと思いますが、その中でサポーターの立ち位置も大きく変わったと思います。サポーターとして子ども実行委員のサポートをするだけではなく、今年度の特徴である「若者」として共にイベントを作り上げるため、サポーターが各ブースのシミュレーションを行うこともありました。例年よりも準備期間が短く子どもへのサポートを手厚めにしてもらった今年度でしたが、サポーターはそれぞれが自分のスタイルを手に入れることができ、例年以上にサポーターの成長を感じる年でもありました。

初めてのユースメンバーとしての活動を通して、たくさんの成長と出会いを経験することが出来ました。ミニふくおか2024で一緒に活動することができた皆、支えてくださった方々、本当にありがとうございました！！

吉岡大智

私は2014年に当日市民として参加して以来、子ども実行委員、サポーターとしてミニふくおかに携わってきました。今年は新たに「ミニふくおかユースプロジェクト」が始動し、私は初めて子どものまちリーダーとしてミニふくおか2024および子ども実行委員会の企画・運営に携わる貴重な経験をさせていただきました。その中で特に強く感じたのは、ミニふくおかが多くの人々との関わりの中で成り立っているということでした。

今年はスタッフの立場からミニふくおかを支え、他のユースメンバーやコーディネーターからの助言を受けながら、子ども実行委員会の活動内容や当日の運営をさらに良いものにするよう努めました。今回は初めての屋外開催かつ事前受付なしという形式だったため、起こりうる問題を予測して事前に対策を講じる必要がありました。会場計画や当日のオペレーションを確認する際には、あらゆる可能性を考慮し、子どもたちが安全に過ごせる環境を整えることを意識しました。

また、子どものまちリーダーとして特に大切にしていたのは、「ココロとカラダの2つの安全確保」です。これはミニふくおかが13年間大切にしてきた重要な理念であり、今年の子ども実行委員会でもお互いを尊重し合い、みんなが安心して活動できるようにひとりひとりが心がけました。最初は子どもたちも自分の意見を伝えることに躊躇していましたが、サポーターやスタッフが楽しい雰囲気を作ることで、次第に子どもたちが打ち解け、全体の結束力が高まっていきました。

子どものまちリーダーとして活動して、子どもの成長を見られただけでなく、自分も多くの人々に支えられて成長することができました。ミニふくおか2024にご協力いただいた方々、本当にありがとうございました！

吉岡秀悟

私がミニふくおかに出会ったのは、10歳のころでした。両親から促されるようにして参加した“ミニふくおか”は、想像以上にワクワクするイベントでした。大人のようにはたらくことができ、大人のようにお金をもらうことができ、大人のように好きな物にお金を使うことができる、そんな初めての体験に胸を躍らせていたことを今でも鮮明に覚えています。

ミニふくおかとの出会いから12年、今年度はユースプロジェクトメンバーとして初めて企画・運営に携わりました。第1回ユース会議では進行管理リーダーに任命され、主にユース会議の議事録作成やタスク管理を担当しました。いわゆる“全体を見る”役割でしたが、これが想像以上に大変でした。私の性格上、ひとつの事に没頭して作業することは得意だったので、割り当てられた業務を遂行することに抵抗を感じることはありませんでしたが、時に数ある作業に没頭しすぎ、全体の把握が遅れたり、全体を見ていて自分の作業がおろそかになったり…を繰り返し、いわゆる“進行管理”という初めての経験に振り回されているような感覚でした。

そんな『初めての経験』に振り回されながらも、”子どもたちを主役にするために何ができるか”を考え続けることは決して諦めませんでした。本番に近づくにつれ、これまでに経験したことのないプレッシャーに押しつぶされそうになることも度々ありました。それでも投げ出すことがなかったのは、かつての私が感じた『ワクワク』を”次世代を担うリーダーたち”に伝えたいという気持ちがあったからだと思います。願わくば、このミニふくおか2024に関わってくれた子どもたちに、私が10歳のころに感じた『ワクワク』を伝えられていれば嬉しく思います。

最後に、これからもミニふくおかが多くの子どもたちに『ワクワク』を経験できる場となり、次の世代に『ワクワク』を伝えたいと思えるようなイベントとして存続することを心より願っております。

藤野里彩

私は、中学2年のときに子ども実行委員としてミニふくおかに初めて参加しました。その後もサポーターとしてミニふくおかに携わっていましたが、今年度は初めて企画・運営に携わるユースメンバーとして参加させていただきました。ユースメンバーの中では主に広報の役割を担い、ミニふくおか2024のホームページの記事やSNSなどの更新、活動中の写真撮影を行いました。

ユースメンバーとして参加した今年度のミニふくおかは、初めてのオープン型での開催となり、最初は戸惑いや不安ばかりでしたが、他のユースメンバーやコーディネーターなどの様々な方々に支えていただいたおかげで乗り越えることができ、ミニふくおかを通して自分自身も成長できたと感じています。

屋外かつ、オープン型という面から、広報担当として私が活動を通して意識したことがあります。このような形で行うというのは、ミニふくおかを様々な人に知ってもらうという狙いもありました。そのため、子どもたちやサポーターの活動の様子をできるだけリアルに伝えられるようなホームページやSNSの記事作りを心掛けました。例えば、その場の雰囲気が伝わるよう、動きのある写真や、子ども実行委員とサポーターが協力している写真、全体の写真など、意識しながら撮影していました。また、当日は特に、SNSをリアルタイムにかつ、全体の様子が網羅できるよう意識しつつ更新することに努めました。

今年度のユースメンバーとしての活動を通して、ミニふくおかの活動は、自分を含め、子どもや若者が大きく成長できる場であることを改めて実感することができました。これからも、若者が中心となった子どもの成長のきっかけとなるような場があり続けてほしいと思います。ミニふくおか2024に携わり、支えてくださった皆さま、本当にありがとうございました！

コーディネーターの視点

上野敬之

今年の「ミニふくおか2024」は、25歳以下のユースメンバーがプロジェクトを組成し企画・運営の中心を担い、本番までの準備期間も例年の半分程度、また福岡市美術館の屋外で事前予約なしの開催というこれまでにほぼ経験したことのない試みを実行していく展開となりました。

これまで「ミニふくおか」に永く携わってきた5人のユースメンバーが中心となり、その経験を元にアイデアを出し、企画を創り、それを実現できるよう沢山の仲間を巻き込みながら進めていく。限られた時間の中で、全体を担う進捗管理、いかに効果的なワークショップを実施し子どもたちが主役となる本番を迎えていくかなど、メンバー各々が自発的に考え、議論をして形にしてきました。

本番当日は、公募で選ばれ複数回のワークショップを積み重ねてきた「子ども実行委員」が主体となり、その支援を行う「サポーター」「ボランティアスタッフ」、そして「ユースプロジェクト」のメンバー、このイベントに携わる全員が一つとなり、当日市民である子どもたちと共に笑顔あふれる盛況なイベントとなったことに大変感激いたしました。

これまで13年続いてきた「ミニふくおか」には、沢山の子どもたちが参加してきました。そこで積み上げられてきた実績が新しい形として発揮された「ミニふくおか2024」は大変価値あるものになったのではないかと思います。

これからの福岡市の未来を創っていく子どもたちに、このミニふくおかの根底に流れるDNAをどのように繋げていくのか。大変大きな課題ではありますが、今回の「ミニふくおか2024」を礎にしてまた新しい要素を組み込み、未来に繋がる取り組みに昇華していくことを期待しております。

緒方 泉
（九州産業大学地域共創学部特任教授）

2024年11月17日（日）の日没前、無事に終わった安堵の笑顔で、プロジェクトメンバー、サポーター、子ども実行委員が記念写真におさまった。

ところで、今回13回目となるミニふくおかは、これまでと異なり、大人が枠組みを決めるのではなく、「若者が主体的にミニふくおかを創る」ことを実行委員会で決定した。

7月28日（土）、実施体制の中心となる5人のプロジェクトメンバー（全て大学生）が集合した。それぞれは、サポーター、子ども実行委員の経験者である。最初は意気揚々と自己紹介をしたが、開催日まで４ヶ月もないイベント概要を聞くと、彼らの顔は曇ってしまった。「えー、どうしよう？そんな短期間では無理、無理！」という声が聞こえてきた。とはいえ、サポーターと子ども実行委員の募集を始めないとスタートラインにつけない。急ぎ、原稿を書き始めるが、なかなかうまくいかない。傍らで見守るコーディネーターも「開催まで大丈夫かな？」と心配するが、なんとか添削指導を受けながら、前に進んでいく。

9月8日（日）、第1回ワークショップが開催された。開催を前にして活動計画書を作成したが、ねらいや時間配分などが定まらず、何回かの添削指導があった。しかし、彼らは失敗を重ねながらも、へこたれることなく、レジリエンス（回復）力を身につけ、どんどん成長していった。

今回のテーマが「ひとりひとりが輝くアートタウン」に決まると、プロジェクトメンバー、サポーター、子ども実行委員の気持ちが一体化され、各回のワークショップはより充実していった。

戸惑いから自覚、責任を経て、行動していく中で、プロジェクトメンバー5人衆（Mさん、Kさん、Sさん、Tさん、Rさん）は、俯瞰する力、まとめる力、伝える力を身につけ、見事に「若者が主体的にミニふくおかを創る」イベントをやりきった。5人衆のさらなる成長が楽しみだ。

ミニふくおか2024
minifukuoka 2024

主催：ミニふくおか実行委員会、福岡市

ミニふくおか実行委員会
- 耘野康臣 (NPO法人九州コミュニティ研究所)
- 岡大輔 (株式会社環境デザイン機構)
- 緒方泉 (九州産業大学地域共創学部)
- 香月千恵 (福岡市こども未来局こども健全育成課)
- 定村俊満 (株式会社ソーシャルデザインネットワークス)
- 白土靖 (株式会社西日本新聞社)
- 高宮由美子 (株式会社YES AND)※実行委員会委員長
- 福田忠昭 (LOCAL&DESIGN株式会社)
- 森裕 (NPO法人 子ども文化コミュニティ)

(五十音順敬称略)

ミニふくおかユースプロジェクト
- 齊田麻邑　プロジェクトリーダー
- 吉岡秀悟　進行管理
- 岡昂樹　サポーター担当
- 吉岡大智　子ども実行委員担当
- 藤野里彩　広報・会計
- 柴田愛理　デザイン
- 添田翔馬　ワークショップ
- 榎田遼太郎　会場設計

コーディネーター
- 高宮由美子　実行委員会委員長・ユースプロジェクトサポート
- 緒方泉　ユースプロジェクトサポート
- 上野敬之　ユースプロジェクトサポート
- 張彦芳　ワークショップサポート

令和6年12月 発行